ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」13

プロローグ：剛田質店の朝

（豪華な店内。剛田が大理石のテーブルに腰掛け、ティーカップを片手に微笑んでいる。）

剛田：「白金くん、今日もゴージャスな風が吹いている…感じませんか？」

白金：「（隅で掃除をしながら）毎日吹いてる風ですよね、それ。特に変わりないと思いますけど。」

剛田：「いえ、今日は特別です！この胸の高鳴り、これは新たなるゴージャスとの出会いの予感！」

白金：「（ぼそっと）…この店主の胸の高鳴りに振り回される一日が始まる…。」

（その時、ベルが鳴り、依頼人が登場する。）

第一幕：依頼人とお宝

（依頼人が布で包まれた品を抱えて入店する。）

依頼人：「剛田先生、こちらの品物を鑑定していただきたく参りました。」

（布を取り除くと、緑色に輝くアマゾナイト製の籠が現れる。）

剛田：「（目を輝かせ）これは…！ゴージャスの極み！白金くん、見なさい！」

白金：「いや、どう見ても普通の…いや、待ってください。これ、本当にアマゾナイトですか？」

剛田：「間違いありません。この輝き、この触感。そして…この優美な編み目！本物のアマゾナイトをここまで精巧に籠に仕立てる技術、ただの籠ではあり得ません！」

（剛田、籠を優雅に持ち上げ、ライトにかざす。）

剛田：「アマゾナイトは“希望の石”。その石を日常の道具にまで昇華させるとは、なんと大胆かつ高貴な発想！これぞゴージャスの真髄！」

白金：「（驚いて）本当に本物なんですか！？どれだけの価値があるんですか、これ？」

剛田：「お値段をつけるのは簡単ではありません。しかし、この完成度、素材、歴史を考えれば、50万ゴージャス…いや、100万ゴージャスは下りませんな！」

白金：「ゴージャスって単位作らないでください！せめて円で！」

剛田：「１ゴージャス＝１万円換算ですので、100万ゴージャスとは1000万円です！」

白金：「1000万円！？籠が！？」

第二幕：価値の実証（市場編）

剛田：「白金くん、驚いてばかりではなく、この品の真価を体験していただきます。」

白金：「何をするつもりですか…？」

剛田：「市場に参りましょう。このアマゾナイトの籠がどれほど生活をゴージャスに変えるかを証明します！」

（剛田と白金が籠を持って市場にやってくる。剛田は堂々と胸を張り、籠を片

手に優雅に歩く。白金は心配そうに後をついてくる。）

果物屋でのやり取り

果物屋の店主：「おや、剛田先生じゃないですか！今日は何をお探しで？」

剛田：「店主よ、このゴージャスな籠に相応しい果物を求めております。特に、美と甘美を兼ね備えたものを。」

果物屋の店主：「そんな特別な基準で果物選ぶお客さん、初めてですよ…。」

（剛田、籠をテーブルに置き、リンゴを一つ手に取る。）

剛田：「このリンゴ、色艶が素晴らしい。しかし…まだだ！」

白金：「（慌てて）まだって何ですか！普通に買えばいいじゃないですか。」

剛田：「美しさだけでなく、香り、触感、そして内なる甘みの調和が必要なのです！これぞゴージャスの心得！」

果物屋の店主：「（半笑いで）えっと…じゃあ、このリンゴ試してみます？」

（剛田、店主の手渡したリンゴを籠に入れる。すると、籠の中でリンゴが宝石のように輝く演出。）

剛田：「ほら白金くん、見なさい。この籠がリンゴを芸術へと昇華させた瞬間を！」

白金：「いや、籠が勝手に輝かせたとか、そんな機能ないですよね？」

（周囲の客が驚きの声を上げ始める。）

市場の客 1：「なんだあの籠！リンゴがめっちゃ綺麗に見える！」

市場の客 2：「ちょっと写真撮らせて！」

剛田：「写真は結構です。ただし、ゴージャスの余韻を味わうなら、こちらで購入を。」

白金：「いや、店主！リンゴ売ってるのは果物屋さんでしょ！」

（果物屋の店主が笑いながら拍手する。）

果物屋の店主：「剛田先生、今日は特別サービスでそのリンゴ、どうぞ！」

剛田：「感謝します。このリンゴ、ゴージャスに扱わせていただきます。」

八百屋でのやり取り

（続いて、剛田は野菜を求めて八百屋へ向かう。籠を片手に微笑みながら。）

八百屋の店主：「剛田さん、今日は何をお探しですか？」

剛田：「ゴージャスたるもの、常に自然の美を愛する。よって、ここでは野菜の美しさを求めます！」

白金：「（ぼそっと）野菜にゴージャスって…なんなんだよ。」

（剛田、トマトを籠に入れ、じっくりと見つめる。）

剛田：「ああ、これは太陽の恵みそのもの。この赤、この艶！自然のアートですな！」

（トマトが籠の中で光り輝く。）

市場の客 1：「あの籠、本当に野菜が輝くのか？魔法みたいだ！」

市場の客 2：「私も同じトマト欲しい！」

八百屋の店主：「すごい宣伝効果ですね！剛田さん、これで売り上げがぐんと上がりそうです。」

白金：「いや、宣伝してるつもりじゃないんですけど！」

パン屋でのやり取り

（最後に剛田がパン屋に立ち寄る。パン屋の香ばしい香りに包まれた店内。）

パン屋の店主：「剛田先生、お久しぶりです。今日は何をお探しですか？」

剛田：「パンです。だが、ただのパンではありません。この籠が輝きを与えるに値する、特別なパンを！」

（店主がクロワッサンを籠に入れると、ゴージャスに輝く。客たちが感動の声を上げる。）

市場の客 1：「あのクロワッサン、なんであんなに美味しそうに見えるの！？」

市場の客２：「私もあの籠欲しい！どこで買えるの！？」

剛田：「残念ながら、この籠は特別な存在。市場で手に入るものではありません。しかし、このパンと共にその一端を味わうことは可能です。」

白金：「（ぼそっと）商売の天才かよ…。」

（剛田と白金が買い物を終えて店に戻る。）

第三幕：質店に戻る

（店に戻ると、剛田は籠をショーケースに飾る。）

白金：「これ、絶対売れるんですかね…？」

剛田：「売れるかどうかではありません。この籠はゴージャスの歴史そのもの。人々に夢と希望を与える存在なのです！」

依頼人：「（笑顔で）さすが剛田先生。では、買取価格をお聞かせいただけますか？」

剛田：「この籠の価値は…1000万円と判断いたします！」

白金：「（震えながら）1000万…大丈夫ですか、それ…？」

依頼人：「（驚きつつ）本当にそこまで！？ありがとうございます！」

剛田：「（誇らしげに）これでまた一つ、ゴージャスの伝説が我が店に加わりました！」

白金：「（ぼそっと）伝説というより、いつか詐欺だって言われそう…。」

エピローグ：ゴージャスな味

（ショーケースに飾られたアマゾナイト製の籠がスポットライトで輝いている。剛田が紅茶を

片手に優雅に座り、白金は隅で掃除をしている。）

剛田：「白金くん、今日も素晴らしい一日でしたな。この籠を通してゴージャスの真髄を多くの人々に届けられるのです。」

白金：「いや、届けるも何も、まだ籠自体は飾ってるだけじゃないですか。」

（剛田が飾り棚に目を向けると、そこには市場で買ったリンゴがひとつ入っている。）

剛田：「そうだ、このリンゴ…せっかくゴージャスな籠に入れたのですから、味を確かめてみましょう。」

白金：「（慌てて）いやいや、鑑定用の展示物なんだから勝手に食べたらダメでしょ！」

剛田：「白金くん、ゴージャスは五感すべてで味わうものです。」

（剛田、リンゴを優雅に手に取り、一口かじる。突然、感動の表情に変わる。）

剛田：「これは…！」

白金：「どうしたんですか？何か変な味でも…？」

剛田：「いや、違う！このリンゴ、まるで宝石のような甘さと香り…！これはゴージャスの味だ！」

白金：「（半信半疑で）ゴージャスな味って…そんなのあるわけ…。」

（白金も恐る恐るリンゴをかじる。）

白金：「（目を見開き）…なにこれ！？すごく美味しい！これ、本当に市場で買った普通のリンゴですよね？」

剛田：「そうです。だが、ただのリンゴをただのリンゴのままにしないのがゴージャスの力！」

（白金が驚きの表情でリンゴを食べ続ける中、剛田が誇らしげにポーズを決める。）

剛田：「覚えておきなさい、白金くん。この籠がリンゴにゴージャスの魂を吹き込んだのです！」

白金：「（呆れながらも笑顔で）…もう、店主には勝てませんね。」

（剛田と白金がリンゴを分け合いながら微笑み合う。）

最後の締め

（剛田が優雅に立ち上がり、カメラに向かって一言。）

剛田：「皆さま、日常の中にもゴージャスは潜んでいます。それを見つけ、味わう心こそが…

『ゴージャスたるもの優雅たれ』の真髄なのです！」

（ライトが籠とリンゴを輝かせる中、幕が閉じる。）

尺割案：『ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」13』

プロローグ：剛田質店の朝（5分）

- 剛田が優雅に朝を過ごす様子。
- 白金のツッコミと剛田の「ゴージャス」な哲学の紹介。
- 依頼人の登場でシーン終了。

第一幕：依頼人とお宝（20分）

- 依頼人がアマゾナイト製の籠を持参。
- 剛田が籠を鑑定し、そのゴージャスさを熱弁。

- **石言葉の解説**（希望、癒し、優雅さ）
  - 「なぜこの籠がゴージャスなのか」の徹底分析。
- 白金が驚きながらも、剛田の独特なテンションに振り回される。

第二幕：価値の実証（市場編）（30分）

- 剛田と白金が籠を実際に使うことで、その価値を実証する場面。
- **市場でのやり取り**
  - 剛田が果物屋、野菜屋、パン屋を回り、「ゴージャスな買い物術」を披露。
  - 周囲の人々が驚き、笑いを誘う。
  - 白金が「普通の籠では？」と冷静にツッコミながらも、徐々に剛田に巻き込まれる。
- **籠の価値を認めるシーン**

- 剛田が籠に入った品々を披露し、ゴージャスさを説明。
- 市場の人々が「美術館に飾るべき」と盛り上がるコメディ展開。

第三幕：質店に戻る（15分）

- 剛田が籠をショーケースに飾り、依頼人と価格交渉。
- 1000万円の価格設定に、白金が驚愕しつつも折れる展開。
- 依頼人が満足して帰り、剛田と白金が振り返るシーン。

エピローグ：ゴージャスな味（10分）

- ショーケースに飾られた籠とリンゴの演出。
- 剛田がリンゴを食べて「ゴージャスな味！」と感動。
- 白金もそれを体験し、笑いと感動の中で二人の絆を描写。